

第2回尾鷲市総合計画審議会ワーキング結果

| Aグループ | 人と環境資源を倍にする！！ |
|-------------|---|
| 意見の概要 | <p>Aグループの意見としては、10年後のまちづくりに向けて、人材・環境の2つをまちの資源として見出し、向上させていくことが重要とされました。</p> <p>尾鷲の恵まれた環境資源を活かすため、自分たちが尾鷲の良い点や悪い点を認識し、自身らがまちづくりに参加することで、市外の方にも自信をもって尾鷲をPRできる人材となること・育てることが重要とされました。</p> <p>また、少子高齢化が深刻な尾鷲では、高齢者にとって優しいまちの形成を目指すと共に、次代を担う若者に対する支援や子育て環境の充実など、若者が住みたいと感じる環境を作ることによって、若者に根付いてもらうことも必要とされています。</p> |
| | |
| 項目 | 付箋の内容 |
| 市民共同 | 市民の政策への参加促進 人に頼らず自分達でやる意識を持つ 人との協力をより強化する 危機感を持たなければならない 尾鷲は終っていることを自覚する |
| 広域連携 | 尾鷲市をなくす 合併して東紀州市を作る(紀比町、以南) 行政同士の連携 |
| 差別化 | 高齢者 とんがり帽子？ 若者を大事にする政策を！ |
| 交流 | 人と人が出会える町 (近隣市町)地域の交流の中心になれる町 |

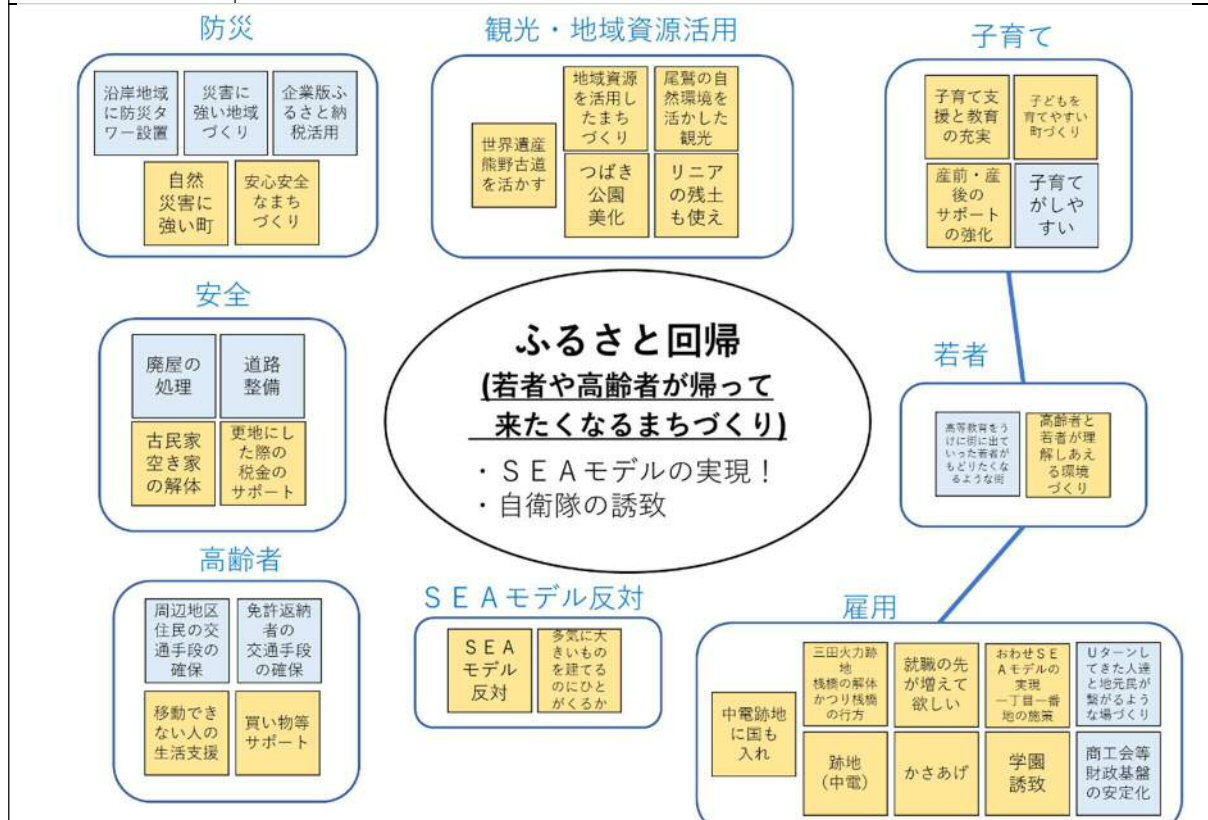
| | | | | | |
|----|---|---|--|--|--|
| | 人と人とのコミュニケーションが出来る場所をつくる 外国人向けの日本語学校を作る | | | | |
| 快適 | 草刈りを定期的にする マイナンバーカードで住民票を出せる様にする 市内の空き家の状況を鮮明にする 何らかの対処をし、有効活用を望む 都市と同等のサービス 情報が受けられる町 | | | | |
| | 安心 | 南海トラフ 災害後のアフターケア対策 災害時の動線を分かり易く(土地勘ない人でも分かるように) 新たなエネルギーでクリーンな町へ 地域と医療福祉の連携 連体意識を常に持って行動出来る町であって欲しい 災害発生に於いても被害を最少にする努力をつくせる町にしたい | | | |
| | | 観光・地域資源 の活用 | 外からの集客 地元の人が地元のPRをできるように 地元の人に向けた宿泊施設の見学会など開催 観光客の受入体制 尾鷲の食材を生かした事業 自然の良さを生かした町づくり 体験型学習の拡充 熊野古道を活用(他地域との連携を密に) 新たなレジャー オリジナル(レジャー)施設 自慢できる町 尾鷲の自然を体感 その素晴らしさを誇れる学校教育システム 自然を体感するのが難しい現在、学校が手助け トムソーヤプロジェクト(海・山・川体験などは◎) | | |
| | | | 子育て | 安心・希望 一人世帯でも生きて行く希望がもてる町に 雨でも楽しめる街づくり 人に優しい町づくり 市民が子育てを応援できる町づくり 親だけに負担させたくない 子育てしやすい 中学校、高等学校における給食化 シングルマザー・ファザーにとって生活しやすい住環境 病院の設備対応診察の質の面で安心できる環境作り | |
| | | | | 人材育成 | リーダーを教育する リーダーを創る 市役所員の意識改革 保育施設の保育時間の延長 ダイバーシティの観点で働きやすい 塾などに頼らなくて良い 学校における教育環境の底上げ 放課後、寺子屋など 将来優秀な人間を形成 尾鷲に恩返しができる人材の育成を目指す |
| | | | | | 移住・定住 |

B グループ ふるさと回帰
(若者や高齢者が帰って来たくなるまちづくり)

意見の概要

Bグループの意見としては、10年後のまちづくりに向けて、一度出ていった若者や高齢者が「尾鷲に帰って来たくなるまちづくり」が最も重要になると考え、世代を超えたふれあいによって市民同士が理解しあえる環境を整え、繋がりを強くすることが「ふるさとへの帰郷意識」へと繋がると考えました。

SEAモデルや自衛隊の誘致については、グループ内でも賛否両論がありました。中部電力の跡地活用、それに関連する若者の雇用については関心が非常に高くなっています。観光や防災、高齢者の暮らしやすさなどの面では、尾鷲の独特の立地・自然環境を踏まえての意見や課題解決の取組アイデアが挙げられました。



B グループ

| 項目 | 内容 |
|-----|-------------------------------|
| 子育て | 子育て支援と教育の充実 |
| | 子どもを育てやすい町づくり |
| | 子育てがしやすい |
| | 産前・産後のサポートの強化 |
| 若者 | 高等教育をうけに街に出ていった若者がもどりたくなるような街 |
| | 高齢者と若者が理解しあえる環境づくり |
| 雇用 | 三田火力跡地 棧橋の解体かつり棧橋の行方 |
| | 跡地(中電) |
| | 就職の先が増えて欲しい |
| | かさあげ |
| | おわせSEAモデルの実現 一丁目一番地の施策 |
| | 学園誘致 |

| | |
|-----------------------|---------------------------|
| | Uターンしてきた人達と地元民が繋がるような場づくり |
| | 商工会等財政基盤の安定化 |
| | 中電跡地に国も入れ |
| 高齢者 | 周辺地区住民の交通手段の確保 |
| | 免許返納者の交通手段の確保 |
| | 移動できない人の生活支援 |
| | 買い物等サポート |
| 安全 | 廃屋の処理 |
| | 古民家空き家の解体 |
| | 更地にした際の税金のサポート |
| | 道路整備 |
| 防災 | 沿岸地域に防災タワー設置 |
| | 災害に強い地域づくり |
| | 企業版ふるさと納税活用 |
| | 自然災害に強い町 |
| | 安心安全なまちづくり |
| | 自然災害に強い町 |
| 観光・ 地域資源活用 | 世界遺産熊野古道を活かす |
| | 地域資源を活用したまちづくり |
| | つばき公園美化 |
| | 尾鷲の自然環境を活かした観光 |
| | リニアの残土も使え |
| SEAモデル 反対 | SEAモデル反対 |
| | 多気に大きいものを建てるのにひとがくるか |

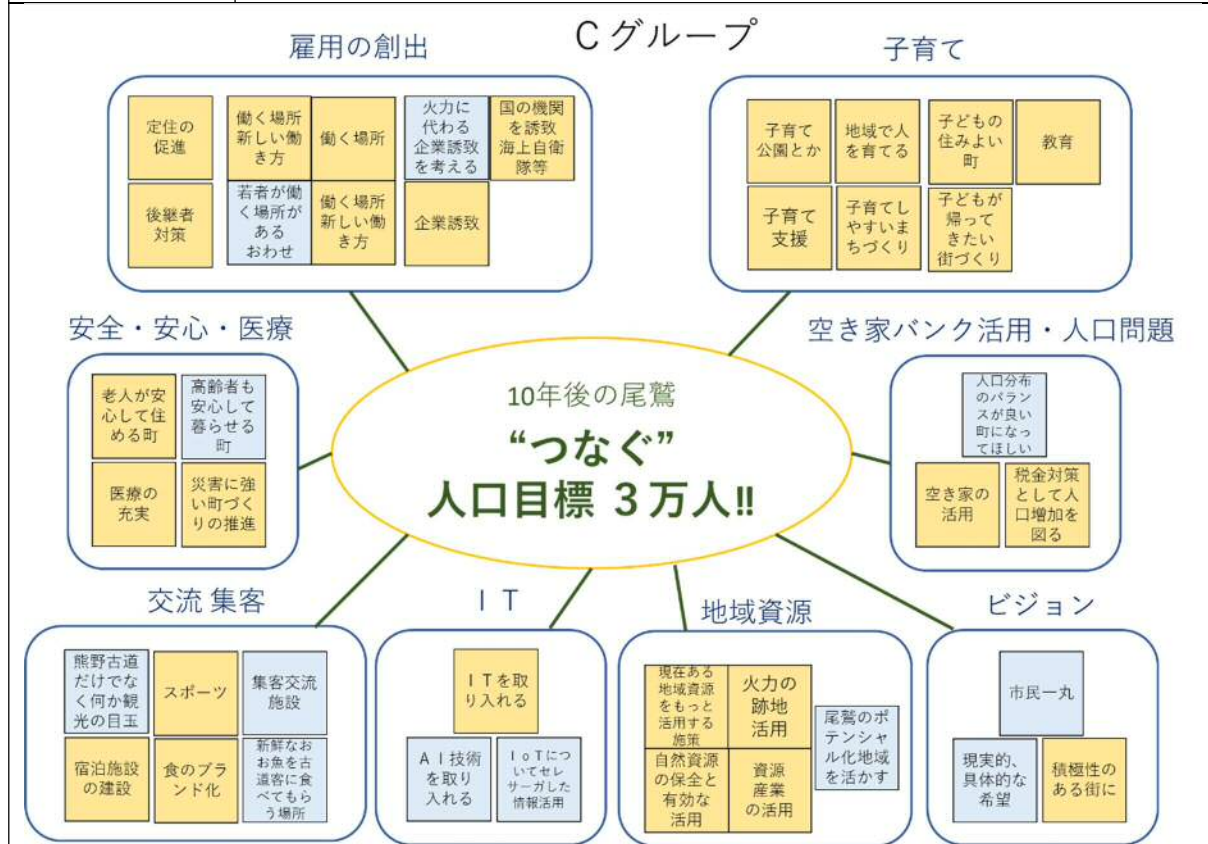
Cグループ “つなぐ” 人口目標 3万人！！

意見の概要

Cグループの意見としては、今後尾鷲市を維持していくためには人口増加に向けた取組が最も重要とされ、特に雇用の場所の確保や子育て環境の充実といった、若者の移住定住促進に繋がる取組を行うべきという意見が多く挙がりました。

それら若者が住みたいと思えるまちづくりの中で、空き家活用や、災害や医療面で安心安全なまちづくりを進め、移住者の受け皿作りと住民にとって住みよいまちを市民一丸となって作っていくことが重要とされています。

また、観光・交流については他のグループ同様、尾鷲の地域資源や火力発電所の跡地等を更に活用することに加え、ITなどの先進的な技術も活用し、新たな方法で市内外の人々を「つなぐ」と言ったアイデアも挙げられました。



| 項目 | 内容 |
|-------|----------------|
| 子育て | 子育て 公園とか |
| | 子育て支援 |
| | 地域で人を育てる |
| | 子育てしやすいまちづくり |
| | 子どもの住みよい町 |
| | 子どもが帰ってきたい街づくり |
| | 教育 |
| 雇用の創出 | 定住の促進 |
| | 後継者対策 |
| | 働く場所 新しい働き方 |
| | 若者が働く場所があるおわせ |
| | 働く場所 |
| | 働く場所 新しい働き方 |

| | |
|-------------------|----------------------|
| | 火力に代わる企業誘致を考える |
| | 企業誘致 |
| | 国の機関を誘致海上自衛隊等 |
| 安全・安心・医療 | 老人が安心して住める町 |
| | 高齢者も安心して暮らせる町 |
| | 医療の充実 |
| | 災害に強い町づくりの推進 |
| 地域資源 | 現在ある地域資源をもっと活用する施策 |
| | 自然資源の保全と有効な活用 |
| | 火力の跡地活用 |
| | 資源産業の活用 |
| | 尾鷲のポテンシャル化地域を活かす |
| 交流 集客 | 熊野古道だけでなく何か観光の目玉 |
| | 宿泊施設の建設 |
| | スポーツ |
| | 集客交流施設 |
| | 食のブランド化 |
| | 新鮮なおお魚を古道客に食べてもらう場所 |
| I T | I Tを取り入れる |
| | A I技術を取り入れる |
| | I o Tについてセラサーガした情報活用 |
| 空き家バンク 活用・人口問題 | 空き家の活用 |
| | 税金対策として人口増加を図る |
| | 人口分布のバランスが良い町になってほしい |
| ビジョン | 市民一丸 |
| | 現実的、具体的な希望 |
| | 積極性のある街に |

【岩崎会長による、ワーキングに対する総評】

今日3チームに分かれて、こういう形で総合計画の基本的な考え方、10年後の尾鷲市を作っていくための考え方みたいなものを皆さんで議論していただきました。この3つのそれぞれの真ん中の部分を見ていただくとやっぱり「なんとなく似ているよなあ」というのを思います。どういうことかっていうと、「繋ぐ」ということ。「繋ぐ」。これはやっぱり3班ともずっと議論を見ていて何かと何かを繋ぐ、限られたものしかない中で、何かと何かを繋いでみると何かができるんじゃないか、そういう繋ぐ機会みたいなものが、今、この尾鷲には欠けているんじゃないか、という、どうもそういう意識が3班とも共通する部分があったような気がします。繋げば、「人と環境資源を倍にする」ということも可能なんじゃないのかな、とか、そして、繋いでいけばまさに「ふるさと回帰」というのも可能になるんじゃないかとか、どうも繋ぐことがひとつの、3つのグループの中の共通するキーワードのような気がします。そして、どの班でも議論があったのが、高齢者の方のこと、地域の高齢化のことを中心とすると、高齢者のことがすごく中心となりますが、いやそうではない、やっぱり若者のことを考えるべきだ、高齢者の住みやすいまちというのは実は、体に障害をもった人であるとか、それからお子さんも住みやすいまちのはずなんですよ、それが所謂ユニバーサルデザインっていうものであります。だから、高齢者が暮らしやすい、つまりそれは尾鷲市民の老若男女が暮らしやすいまちになるはずなんです。そうするとその為に何が必要になるのかということ、10年後を見据えてこれからかなり細かい項目までを並べていくのが総合計画、だから、高齢者と若者を対立的に考えるんじゃなくて、「高齢者も若者も」ということをやっぱりずっと追及し続けたいと思っています。今日昼間、ちょっと別件でお子さんをもった若い尾鷲の市民の方とお話しする機会がありました。そしたら切実におっしゃっていたのが、「子どもができて、子どもと暮らしてみても、尾鷲ってしんどいなって思っているんです。」っていう話、しんどいなっていう前に「ものすごく子育て環境は良いです。要するに地域のいろんな人達に子育ての相談もできるし、その意味ではすごく良いんだけど、ただ、雨が多いこの尾鷲で、雨が降ると子どもと一緒に遊びに行くところがない、子どもをずっと家の中で面と向かって遊ばせていると、どんどん気分が落ち込んでいく。だから、子どもと一緒に雨の日も外でワーワー遊べるような機会、場所っていうのはないんでしょうかね、できないんでしょうかね。」というようにお話があって、それはひょっとすると今回のあの平場のところに、僕はあってもいいような気がする。例えば、これはあの実は原発の関係で原発の被災地にできていますけれども、屋内の子どものための遊び場っていうのを作っている所があります。それは原発事故のせいで作っているのだけれども、尾鷲の場合には全天候型の子どもの遊び場というのが僕はあってもいいんじゃないか、なんかそんな、子どもと、そういうところに僕はじいちゃんばあちゃんもいて、そして子どもと一緒にワーワーできるような、そんな場所があるとまさに「繋ぐ」の大きな一つの仕掛けになっていくんじゃないかと言うような気がして、そんな夢を抱きながらこれから10年後の尾鷲を考えていくそういう手がかりが今日は得られたんじゃないかな、という風に思っています。皆さんがこの短時間の間にいろいろお考えいただいたこと、これに敬意を表すると共に、これは市の皆さんに課された大きな宿題がこの3つのグループから出てきたんだと、ということをお願いして、今日のこの会は終わりにしたいと思います。